

琴のそら音

夏目漱石

青空文庫

「珍らしいね、久しく来なかつたじゃないか」と津田君が出過ぎた洋灯ランブの穂を細めながら尋ねた。

津田君がこう云つた時、余ははち切れて膝頭ひざがしらの出そうなズボンの上で、相馬焼そうまやきの茶碗ちやわんの糸底いとそこを三本指でぐるぐる廻しながら考えた。なるほど珍らしいに相違ない、この正月に顔を合せたぎり、花盛りの今日きょうまで津田君の下宿を訪問した事はない。

「来よう来ようと思ひながら、つい忙しいものだから——」

「そりやあ、忙がしいだろう、何と云つても学校にいたうちとは違うからね、この頃でもやはり午後六時までかい」

「まあ大概そのくらいさ、家うちへ帰つて飯を食うとそれなり寝てしまふ。勉強どころか湯にも碌ろくろく々は這入はいらないくらいだ」と余は茶碗を畳の上へ置いて、卒業が恨うらめしいと云う顔をして見せる。

津田君はこの一言いちごんに少々同情の念を起したと見えて「なるほど少し瘠やせたようだが、よほど苦しいのだろう」と云う。気のせいか当人は学士になってから少々肥ふとつたように見えるのが癩しかに障る。机の上に何だか面白そうな本を広げて右の頁ページの上に鉛筆で註が入れて

ある。こんな閑があるかと思うと羨ましくもあり、忌々しくもあり、同時に吾身が恨めしくなる。

「君は不変勉強で結構だ、その読みかけてある本は何かね。ノートなどを入れてだいぶ叮嚀に調べているじゃないか」

「これか、なにこれは幽霊の本さ」と津田君はすこぶる平気な顔をしている。この忙しい世の中に、流行りもせぬ幽霊の書物を澄まして愛読するなどというのは、呑気を通り越して贅沢の沙汰だと思う。

「僕も気楽に幽霊でも研究して見たいが、——どうも毎日芝から小石川の奥まで帰るのだから研究は愚か、自分が幽霊になりそうなくらいさ、考えると心細くなってしまふ」

「そうだったね、つい忘れていた。どうだい新世帯の味は。一戸を構えると自から主人らしい心持がするかね」と津田君は幽霊を研究するだけあって心理作用に立ち入った質問をする。

「あんまり主人らしい心持もしないさ。やつぱり下宿の方が気楽でいいようだ。あれでも万事整頓していたら旦那の心持と云う特別な心持になれるかも知れんが、何しろ眞鍮の薬缶で湯を沸かしたり、ブリツキの金盥で顔を洗つてる内は主人らしくないからな」

と実際のところを白状する。

「それでも主人さ。これが俺のうちだと思えば何となく愉快だろう。所有と云う事と愛あいせ惜きという事は大抵の場合において伴なうのが原則だから」と津田君は心理学的に人の心を説明してくれる。学者と云うものは頼みもせぬ事を一々説明してくれる者である。

「俺の家うちだと思えばどうか知らんが、てんで俺の家うちだと思いたくないんだからね。そりや名前だけは主人に違いないさ。だから門かど口ぐちにも僕の名刺だけは張り付けて置いたがね。

七円五十銭の家賃の主人なんざあ、主人にしたところが見事な主人じゃない。主人中の属官なるものだあね。主人になるなら勅任主人か少なくとも奏任主人にならなくつちや愉快はないさ。ただ下宿の時分より面倒が殖ふえるばかりだ」と深くも考えずに浮気うわきの不平だけを發表して相手の気色けしきを窺うかがう。向うが少しでも同意したら、すぐ不平の後陣ごしんを繰くり出すつもりである。

「なるほど真理はその辺にあるかも知れん。下宿を続けている僕と、新たに一戸を構えた君とは自から立脚地が違うからな」と言語はすこぶるむずかしいがとにかく余の説に賛成だけはしてくれる。この模様ならもう少し不平を陳列しても差し支さはなつかえない。

「まずうちへ帰ると婆さんが横綴よこじじの帳面を持って僕の前へ出てくる。今日は御味噌ごんいちを三

錢、大根を二本、鶉うずら豆まめを一錢五厘買いましたと精密なる報告をするんだね。厄介きわまるのさ」

「厄介きわまるなら廃よせばいいじゃないか」と津田君は下宿人だけあつて無雑むぞうさ作な事を言う。

「僕は廃よしてもいいが婆さんが承知しないから困る。そんな事は一々聞かないでもいいから好加減いかげんにしてくれと云うと、どう致しまして、奥様の入いらっしやらない御家おうちで、御台所を預かつております以上は一錢一厘でも間違いがあつてはなりません、てつて頑がんとして主人の云う事を聞かないんだからね」

「それじゃあ、ただうんうん云つて聞きいてる振ふりをしていりやよかろう」津田君は外部の刺激のいかに関せず心は自由に働はたらき得ると考えているらしい。心理学者にも似合あひからぬ事だ。

「しかしそれだけじゃないのだからな。精細なる会計報告が済むと、今度は翌日あすの御菜おかずについて綿密な指揮を仰ぐのだから弱る」

「見計みはからつて調理こしらえろと云えば好いいじやないか」

「ところが当人見計みはからうだけに、御菜おかずに関して明瞭なる觀念がないのだから仕方がない」

「それじゃ君が云い付けるさ。御菜のプログラムぐらい訳ないじゃないか」

「それが容易く出来るくらいなら苦にやならないさ。僕だって御菜上の智識はすこぶる乏しいやね。明日の御みおつけの実は何に致しましてようとかると、最初から即答は出来ない男なんだから……」

「何だい御みおつけと云うのは」

「味噌汁の事さ。東京の婆さんだから、東京流に御みおつけと云うのだ。まずその汁の何を何に致しましてようとか聞かれると、実になり得べき者を秩序正しく並べた上で選択をしなければならんだろう。一々考え出すのが第一の困難で、考え出した品物について取捨をするのが第二の困難だ」

「そんな困難をして飯を食ってるのは情ない訳だ、君が特別に数奇なものが無いから困難なんだよ。二個以上の物体を同等の程度で好悪するときは決断力の上に遅鈍なる影響を与えるのが原則だ」とまた分り切った事をわざわざむずかしくしてしまう。

「味噌汁の実まで相談するかと思うと、妙なところへ干渉するよ」

「へえ、やはり食物上にかね」

「うん、毎朝梅干に白砂糖を懸けて来て是非一つ食えッて云うんだがね。これを食わない

と婆さんすこぶる御機嫌が悪いのさ」

「食えばどうかするのかい」

「何でも厄病除やくびょうよけのまじないだそうだ。そうして婆さんの理由が面白い。日本中どの宿屋へ泊つても朝、梅干を出さない所はない。まじないが利きかなければ、こんなに一般の習慣となる訳がないと云つて得意に梅干を食わせるんだからな」

「なるほどそれは一理あるよ、すべての習慣は皆相応の功力があるので維持せらるるのだから、梅干だつて一概に馬鹿には出来ないさ」

「なんて君まで婆さんの肩を持った日にや、僕はいよいよ主人らしからざる心持に成つてしまわあ」と飲みさしの巻煙草まきたばこを火鉢の灰の中へ擲たき込む。燃え残りのマッチの散る中に、白いものがさと動いて斜ななめに一の字が出来る。

「とにかく旧弊な婆さんだな」

「旧弊はとくに卒業して迷信婆ばばあ々々。何でも月に二三返べんは伝通院でんずういん辺の何とか云う坊主の所へ相談に行く様子だ」

「親類に坊主でもあるのかい」

「なに坊主が小遣取りこづかいとに占うらいをやるんだがね。その坊主がまた余計な事ばかり言うもん

だから始末に行かないのさ。現に僕が家を持つ時なども鬼門だとか八方塞りだとか云つて大に弱らしたもんだ」

「だって家を持つてからその婆さんを雇つたんだらう」

「雇つたのは引き越す時だが約束は前からして置いたのだからね。実はあの婆々も四谷の宇野の世話で、これなら大丈夫だ独りで留守をさせても心配はないと母が云うからきめた訳さ」

「それなら君の未来の妻君の御母さんの御眼鏡で人撰に預つた婆さんだからたしかかなもんだらう」

「人間はたしかに相違ないが迷信には驚いた。何でも引き越すと云う三日前に例の坊主の所へ行つて見て貰つたんだそうさ。すると坊主が今本郷から小石川の方へ向いて動くのはなはだよくない、きつと家内に不幸があると云つたんだがね。——余計な事じゃないか、何も坊主の癖にそんな知つた風な妄言を吐かんでもの事だあね」

「しかしそれが商売だからしようがない」

「商売なら勘弁してやるから、金だけ貰つて当り障りのない事を喋舌るがいいや」

「そう怒つても僕の咎じやないんだから埒はあかんよ」

「その上若い女に崇ると御負けを附加したんだ。さあ婆さん驚くまい事か、僕のうちに若い女があるとすれば近い内貰うはずの宇野の娘に相違ないと自分で見解を下して独りで心配しているのさ」

「だって、まだ君の所へは来んのだろう」

「来んうちから心配をするから取越苦労さ」

「何だか洒落か真面目か分らなくなつて来たぜ」

「まるで御話にも何もなりやしない。ところで近頃僕の家の方で野良犬が遠吠をやり出したんだ。……」

「犬の遠吠と婆さんとは何か関係があるのかい。僕には聯想さえ浮ばんが」と津田君はいかに得意の心理学でもこれは説明が出来悪いとちよつと眉を寄せる。余はわざと落ちつき払つて御茶を一杯と云う。相馬焼の茶碗は安くて俗な者である。もとは貧乏士族が内職に焼いたとさえ伝聞している。津田君が三十匆の出殻を浪々この安茶碗についでくれた時余は何となく厭な心持がして飲む気がしなくなつた。茶碗の底を見ると狩野法眼一元信流の馬が勢よく跳ねている。安いに似合わず活潑な馬だと感心はしたが、馬に感心したからと云つて飲みたくない茶を飲む義理もあるまいと思つて茶碗は手に取らなかつた。

「さあ飲みたまえ」と津田君が促^{うな}がす。

「この馬はなかなか勢がいい。あの尻尾^{しっぽ}を振^{たて}つて鬣^{がみ}を乱^{みだ}している所は野馬^{のんま}だね」と茶を飲まない代りに馬を賞^ほめてやつた。

「冗談^{じょうだん}じゃない、婆さんが急に犬になるかと、思うと、犬が急に馬になるのは烈^{はげ}しい。それからどうしたんだ」としきりに後^{あと}を聞きたがる。茶は飲まんでも差^さし支^{つか}えない事となる。

「婆さんが云うには、あの鳴き声はただの鳴き声ではない、何でもこの辺^{へん}に変^{へん}があるに相違^{ちが}ないから用心しなくてはいかんと云うのさ。しかし用心をしると云ったって別段用心の仕^し様^{よう}もないから打ち遣^やつて置くから構^かわないが、うるさいには閉口^{へいこう}だ」

「そんなに鳴き立てるのかい」

「なに犬はうるさくも何ともないさ。第一僕はぐうぐう寝^ねてしまうから、いつどんなに吠^ほえるのか全く知らんくらいさ。しかし婆さんの訴^うえは僕の起^おきている時を拵^{えら}んで来るから面倒^{めんどう}だね」

「なるほどいかに婆さんでも君の寝ている時をよつて御氣^{おんき}を御^おつけ遊^{あそ}ばせとも云うまい」
「ところへもつて来て僕の未来の細君^{かづね}が風邪^{かぜ}を引いたんだね。ちようど婆さんの御^お誂^{あつら}え

通りに事件が輻輳したからたまらない」

「それでも宇野の御嬢さんはまだ四谷にいるんだから心配せんでもよさそうなものだ」

「それを心配するから迷信婆々さ、あなたが御移りにならんと御嬢様の御病気がはやく御全快になりませんから是非この月中に方角のいい所へ御転宅遊ばせと云う訳さ。飛んだ預言者に捕まって、大迷惑だ」

「移るのもいいかも知れんよ」

「馬鹿あ言つてら、この間越したばかりだね。そんなにたびたび引越しをしたら身代限りをするばかりだ」

「しかし病人は大丈夫かい」

「君まで妙な事を言うぜ。少々伝通院の坊主にかぶれて来たんじやないか。そんなに人を威嚇かすもんじやない」

「威嚇かすんじやない、大丈夫かと聞くんだ。これでも君の妻君の身の上を心配したつもりなんだよ」

「大丈夫にきまつてるさ。咳嗽は少し出るがインフルエンザなんだもの」

「インフルエンザ？」と津田君は突然余を驚かすほどな大きな声を出す。今度は本当に威

嚇かされて、無言のまま津田君の顔を見詰める。

「よく注意したまえ」と二句目は低い声で云った。初めの大きな声に反してこの低い声が耳の底をつき抜けて頭の中へしんと浸み込んだような気持がする。なぜだか分らない。細い針は根まで這入る、低くても透る声は骨に答えるのであろう。碧瑠璃の大空に瞳ほどな黒き点をはたと打たれたような心持ちである。消えて失せるか、溶けて流れるか、武庫山卸しにならぬとも限らぬ。この瞳ほどな点の運命はこれから津田君の説明で決せられるのである。余は覚えず相馬焼の茶碗を取り上げて冷たき茶を一時にぐつと飲み干した。

「注意せんといかんよ」と津田君は再び同じ事を同じ調子で繰り返す。瞳ほどな点が一段の黒味を増す。しかし流れるとも広がるとも片づかぬ。

「縁喜でもない、いやに人を驚かせるぜ。ワハハハハハ」と無理に大きな声で笑って見せたが、腑の抜けた勢のない声が無意味に響くので、我ながら気がついて途中でぴたりとやめた。やめると同時にこの笑がいよいよ不自然に聞かれたのでやはりしまいまで笑い切れば善かつたと思う。津田君はこの笑を何と聞いたか知らん。再び口を開いた時は依然として以前の調子である。

「いや実はこう云う話がある。ついこの間の事だが、僕の親戚の者がやはりインフルエン

ザに罹^かつてね。別段の事はないと思つて好^い加^い減^げにして置いたら、一週間目から肺炎に變じて、とうとう一箇月立たない内に死んでしまった。その時医者の話さ。この頃のインフルエンザは性^たが悪^ちい、じきに肺炎になるから用心をせんといかんと云つたが——実に夢のようさ。可^か哀^{わい}そうだね」と言い掛けて厭^いな寒^やい顔をする。

「へえ、それは飛んだ事だつた。どうしてまた肺炎などに変じたのだ」と心配だから参考のため聞いて置く気になる。

「どうしてつて、別段の事情もないのだが——それだから君のも注意せんといかんと云うのさ」

「本^ま当^じだね」と余は満腹の真^ま面^じ目をこの四文字に籠^こめて、津田君の眼の中を熱心に覗^のき込^ぞんだ。津田君はまだ寒^さい顔をしている。

「いやだいやだ、考えてもいやだ。二十二や三で死んでは実につまらんからね。しかも所^お天^とは戦争に行つてゐるんだから——」

「ふん、女か？ そりや氣の毒^どだなあ。軍人だね」

「うん所^つ天^つは陸軍中尉^{じゆう}さ。結婚してまだ一年にならん^んのさ。僕は通^つ夜^やにも行き葬^{まう}式の供^たにも立^たつたが——その夫人の御^お母^かさんが泣^ないてね——」

「泣くだろう、誰だって泣かあ」

「ちようど葬式の当日は雪がちらちら降つて寒い日だったが、御経が済んでいよいよ棺を埋める段になると、御母さんが穴の傍へしやがんだぎり動かない。雪が飛んで頭の上が斑になるから、僕が蝙蝠傘をさし懸けてやった」

「それは感心だ、君にも似合わない優しい事をしたものだ」

「だって気の毒で見えられないもの」

「そうだろう」と余はまた法眼元信の馬を見る。自分ながらこの時は相手の寒い顔が伝染しているに相違ないと思つた。咄嗟の間に死んだ女の所天の事が聞いて見なくなる。

「それでその所天の方は無事なのかね」

「所天は黒木軍についているんだが、この方はまあ幸に怪我もしないようだ」

「細君が死んだと云う報知を受取つたらさぞ驚いたろう」

「いや、それについて不思議な話があるんだがね、日本から手紙の届かない先に細君がちゃんと亭主の所へ行つてゐるんだ」

「行つてるとは？」

「逢いに行つてゐるんだ」

「どうして？」

「どうしてって、逢いに行ったのさ」

「逢いに行くにも何にも当人死んでるんじゃないか」

「死んで逢いに行ったのさ」

「馬鹿あ云つてら、いくら亭主が恋しいつたつて、そんな芸が誰に出来るもんか。まるで林屋正三の怪談だ」

「いや実際行つたんだから、しようがない」と津田君は教育ある人にも似合ず、頑固がんこに愚ぐな事を主張する。

「しようがないつて——何だか見て来たような事を云うぜ。おかしいな、君本当にそんな事を話してるのかい」

「無論本当さ」

「こりや驚いた。まるで僕のうちの婆さんのようだ」

「婆さんでも爺さんでも事実だから仕方がない」と津田君はいよいよ躍起やつきになる。どうも余にからかっているようにも見えない。はてな真面目まじめで云っているとすれば何か曰いわくのある事だろう。津田君と余は大学へ入つてから科は違つたが、高等学校では同じ組にいた事

もある。その時余は大概四十何人の席末を汚すのが例であつたのに、先生は然として常に二三番を下らなかつたところをもつて見ると、頭脳は余よりも三十五六枚方明晰に相違ない。その津田君が躍起になるまで弁護するのだから満更の出鱈目ではあるまい。余は法学士である、刻下の事件をありのままに見て常識で捌いて行くよりほかに思慮を廻らすのは能わざるよりもむしろ好まざるところである。幽霊だ、祟だ、因縁だなどと雲を攫むような事を考えるのは一番嫌である。が津田君の頭脳には少々恐れ入っている。その恐れ入つて先生が真面目に幽霊談をするとなると、余もこの問題に対する態度を義理にも改めなくなる。実を云うと幽霊と雲くもすけ助は維新以来永久廃業した者とのみ信じていたのである。しかるに先刻から津田君の容子を見ると、何だかこの幽霊なる者が余の知らぬ間に再興されたようにもある。先刻机の上にある書物は何かと尋ねた時にも幽霊の書物だとか答えたと記憶する。とにかく損はない事だ。忙がしい余に取つてはこんな機会はまだとあるまい。後学のため話だけでも拝聴して帰ろうとようやく肚の中で決心した。見ると津田君も話の続きが話したいと云う風である。話したい、聞きたいと事がきまれば訳はない。漢水は依然として西南に流れるのが千古の法則だ。

「だんだん聞き糺して見ると、その妻と云うのが夫の出征前に誓つたのだそうだ」

「何を？」

「もし万一御留守中に病気で死ぬような事がありましたもただは死にませんで」

「へえ」

「かなら必こんぱくず魂おとぼ魄おとぼだけは御傍おそばへ行つて、もう一遍御目に懸かかりますと云つた時に、亭主は軍人で磊らい落らくな気き性せうだから笑いながら、よろしい、いつでも来なさい、戦いくさの見物をさしてやるからと云つたぎり満州へ渡つたんだがね。その後そんな事はまるで忘れてしまつていこう気にも掛けなかつたそうだ」

「そうだろう、僕なんざ軍いくさに出なくつても忘れてしまわあ」

「それでその男が出立をする時細君が色々手伝つて手荷物などを買ってやった中に、懐中持の小さい鏡があつたそうだ」

「ふん。君は大変詳しく調べているな」

「なにあとで戦地から手紙が来たのでその顛てんまつ末が明瞭になつた訳だが。——その鏡を先生常に懐中していてね」

「うん」

「ある朝例のごとくそれを取り出して何心なく見たんだそうだ。するとその鏡の奥に写つ

たのが——いつもの通り髭だらけな垢染みた顔だろうと思うと——不思議だねえ——実に妙な事があるじゃないか」

「どうしたい」

「青白い細君の病気に窺れた姿がスーとあらわれたと云うんだがね——いえそれはちよつと信じられんのさ、誰に聞かしても嘘だろうと云うさ。現に僕などもその手紙を見るまでは信じない一人であつたのさ。しかし向うで手紙を出したのは無論こちらから死去の通知の行つた三週間も前なんだぜ。嘘をつくつたつて嘘にする材料のない時ださ。それにそんな嘘をつく必要がないだろうじゃないか。死ぬか生きるかと云う戦争中にこんな小説染みた呑気な法螺を書いて国元へ送るものは一人もない訳ださ」

「そりや無い」と云つたが実はまだ半信半疑である。半信半疑ではあるが何だか物凄、気味の悪い、一言にして云うと法学士に似合わしからざる感じが起こつた。

「もつとも話しはしなかつたそうさ。黙つて鏡の裏から夫の顔をしけじけ見詰めたぎりだそうだが、その時夫の胸の中に訣別の時、細君の言つた言葉が渦のように忽然と湧いて出たと云うんだが、こりやそうだろう。焼小手で脳味噌をじゅつと焚かれたような心持だと手紙に書いてあるよ」

「妙な事があるものだな」手紙の文句まで引用されると是非共信じなければならぬようになる。何となく物騒ぶっそうな気合けわいである。この時津田君がもしワツとでも叫んだら余はきつと飛び上つたに相違ない。

「それで時間を調べて見ると細君が息を引き取つたのと夫が鏡おつとを眺ながめたのが同日同刻になつている」

「いよいよ不思議だな」この時ときに至つては真面目に不思議と思ひ出した。「しかしそんな事が有り得る事かな」と念のため津田君に聞いて見る。

「ここにもそんな事を書いた本があるがね」と津田君は先刻さつぎの書物を机の上から取り卸しながら「近頃じゃ、有り得ると云う事だけは証明されそうだよ」と落ちつき払って答える。法学士の知らぬ間まに心理学者の方では幽霊を再興しているなど思うと幽霊もいよいよ馬鹿に出来なくなる。知らぬ事には口が出せぬ、知らぬは無能力である。幽霊に関しては法学士は文学士に盲従しなければならぬと思う。

「遠い距離において、ある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的变化を起すと……」

「僕は法学士だから、そんな事を聞いても分らん。要するにそう云う事は理論上あり得る

んだね」余のごとき頭脳不透明なるものは理窟りくつを承うけたまわるより結論だけ呑み込んで置く方が簡便である。

「ああ、つまりそこへ帰着するのさ。それにこの本にも例が沢山あるがね、その内でロード・ブローアムの見た幽霊などは今の話しとまるで同じ場合に属するものだ。なかなか面白い。君ブローアムは知っているだろう」

「ブローアム？ ブローアムたなんだい」

「英国の文学者さ」

「道理で知らんと思つた。僕は自慢じゃないが文学者の名なんかシエクスピヤとミルトンとそのほかに二三人しか知らんのだ」

津田君はこんな人間と学問上の議論をするのは無駄だと思つたか「それだから宇野の御嬢さんもよく注意したまいと云う事さ」と話を元へ戻す。

「うん注意はさせるよ。しかし万一の事がありましたらきつと御目に懸りに上りますなんて誓ちかは立てないのだからその方は大丈夫だろう」と洒落しやれて見たが心うちの中は何となく不愉快であつた。時計を出して見ると十一時に近い。これは大変。うちではさぞ婆さんが犬の遠と吠おぼえを苦おぼえにしているだろうと思うと、一刻も早く帰りたくなる。「いずれその内婆さんに

近づきになりに行くよ」と云う津田君に「御馳走をするから是非来たまえ」と云いながら白山御殿町の下宿を出る。

我からと惜気おしげもなく咲いた彼岸桜ひがんざくらに、いよいよ春が来たなど浮かれ出したのもわずかに三日の間である。今では桜自身さえ早待はやまつたと後悔しているだろう。生温なまぬるく帽を吹く風に、額際ひたいぎわから煮染み出す膏あぶらと、粘り着く砂埃すなほこりとをいっしょに拭ぬぐい去つた一昨日の事を思うと、まるで去年のような心持ちがする。それほどきのうから寒くなつた。今夜は一層である。冴返さえかえるなどと云う時節でもないに馬鹿馬鹿ばかばかしいと外套がいとうの襟えりを立てて盲も啞うあ学校の前から植物園の横をだらだらと下りた時、どこで撞つく鐘だか夜の中に波を描いて、静かな空をうねりながら来る。十一時だなと思う。——時の鐘は誰が発明したものか知らん。今までは気がつかなくつたが注意して聴いて見ると妙な響である。一つ音が粘り強ねばい餅もちを引き千切ちぎつたように幾つにも割れてくる。割れたから縁が絶えたかと思うと細くなつて、次の音に繋つながる。繋がつて太くなつたかと思うと、また筆の穂のように自然と細くなる。——あの音はいやに伸びたり縮んだりするなと考えながら歩行あるくと、自分の心臓の鼓動も鐘の波のうねりと共に伸びたり縮んだりするように感ぜられる。しまいには鐘の音にわが呼吸を合せたくなる。今夜はどうしても法学士らしくないと、足早に交番の角を曲る

とき、冷たい風に誘われてポツリと大粒の雨が顔にあたる。

極楽水はいやに陰気なところである。近頃は両側へ長家が建ったので昔ほど淋しくはないが、その長家が左右共鬩然として空家のように見えるのは余り気持のいいものではない。貧民に活動はつき物である。働いておらぬ貧民は、貧民たる本性を遺失して生きたものとは認められぬ。余が通り抜ける極楽水の貧民は打ども蘇み返る景色なきまでに静かである。——實際死んでいるのだろう。ポツリポツリと雨はようやく濃かになる。傘を持って来なかつた、ことによると帰るまでにはずぶ濡になるわいと舌打をしながら空を仰ぐ。雨は闇の底から蕭々と降る、容易に晴れそうにもない。

五六間先にたちまち白い者が見える。往來の真中に立ち留つて、首を延してこの白い者をすかしているうちに、白い者は容赦もなく余の方へ進んでくる。半分と立たぬ間に余の右側を掠めるごとく過ぎ去つたのを見ると——蜜柑箱のようなものに白い巾をかけて、黒い着物をきた男が二人、棒を通して前後から担いで行くのである。おおかた葬式か焼場であろう。箱の中のは乳飲子に違いない。黒い男は互に言葉も交えずに黙つてこの棺桶を担いで行く。天下に夜中棺桶を担うほど、当然の出来事はあるまいと、思い切つた調子でコツコツ担いで行く。闇に消える棺桶をしばらくは物珍らし気に見送つて振り返

つた時、また行手から人声が聞え出した。高い声でもない、低い声でもない、夜が更ふけて
いるので存外反響はげが烈はげしい。

「昨日きのう生れて今日きょう死ぬ奴もあるし」と一人が云うと「寿命だよ、全く寿命だから仕方がな
い」と一人が答える。二人の黒い影がまた余の傍そばを掠かすめて見る間に闇まの中へもぐり込む。

棺あしの後を追って足早きやくに刻む下駄の音のみが雨に響く。

「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」と余は胸うちの中で繰り返して見た。昨日生まれて今日死
ぬ者さえあるなら、昨日病気に罹かかって今日死ぬ者は固もとよりあるべきはずである。二十六年
も娑婆しゃばの気を吸ったものは病気に罹かからんでも充分死ぬ資格を具そなえている。こうやって極楽
水を四月三日の夜の十一時に上のぼりつつあるのは、ことによると死しに上のぼってるのかも知れ
ない。——何だか上のぼりたくない。しばらく坂の途中で立つて見る。しかし立つているのは、
ことによると死しに立たっているのかも知れない。——また歩あり出です。死ぬと云う事がこ
れほど人の心を動かすとは今までつい気がつかなんだ。気がついて見ると立つても歩行い
ても心配になる、このようすでは家うちへ帰かえって蒲団ふとんの中へ這はい入いってもやはり心配になるかも
知れぬ。なぜ今までは平気で暮くしていたのであろう。考えて見ると学校にいた時分は試験
とベースボールで死ぬと云う事を考える暇ひまがなかった。卒業してからはペンとインキとそ

れから月給の足らないのと婆さんの苦情でやはり死ぬと云う事を考える暇がなかった。人間は死ぬ者だとはいかに呑気のんきな余よでも承知しておつたに相違ないが、實際余も死ぬものだと感じたのは今夜が生れて以来始めてである。夜と云うむやみに大きな黒い者が、歩行しても立つても上下四方から閉じ込めていて、その中に余と云う形体を溶かし込まぬと承知せぬぞと逼るせまように感ぜらるる。余は元来呑気なだけに正直なところ、功名心には冷淡な男である。死ぬとしても別に思い置く事はない。別に思い置く事はないが死ぬのは非常に厭だいや、どうしても死にたくない。死ぬのはこれほどいやな者かなと始めて覺つたように思う。雨はだんだん密みつになるので外套がいとうが水を含んで触ると、濡れた海綿かいめんを圧おすようにじくじくする。

竹早町を横ぎつて切支丹坂きりしたんざかへかかる。なぜ切支丹坂と云うのか分らないが、この坂も名前に劣らぬ怪しい坂である。坂の上へ来た時、ふとせんだつてここを通つて「日本一急な坂、命の欲しい者は用心じや用心じや」と書いた張札が土手の横からはすに往来へ差し出ているのを滑稽こっけいだと笑つた事を思い出す。今夜は笑うどころではない。命の欲しい者は用心じやと云う文句が聖書にもある格言のように胸に浮ぶ。坂道は暗い。滅多めったに下りると滑すべつて尻餅しりもちを搗く。険けん呑のんだと八合目あたりから下を見て覗ねらいをつける。暗くて何も

よく見えぬ。左の土手から古ふるえのき榎えのきが無遠慮に枝を突き出して日の目の通わぬほどに坂を蔽おほうているから、昼でもこの坂を下りる時は谷の底へ落ちると同様あまり善いい心持ではない。榎は見えるかなと顔を上げて見ると、あると思えばあり、無いと思えば無いほどな黒い者に雨の注ぐ音がしきりにする。この暗まつくら闇な坂を下りて、細い谷道を伝つて、茗荷みょうが谷だにを向へ上つて七八丁行けば小日向台町こびなただいまちの余が家へ帰られるのだが、向へ上がるまでがちと気味がわるい。

茗荷谷の坂の中途に当るくらいな所に赤あざや鮮かな火が見える。前から見えていたのか顔をあげる途端に見えだしたのか判然しないが、とにかく雨を透すかしてよく見える。あるいは屋敷の門口もんぐちに立ててある瓦斯灯ガスとうではないかと思つて見ていると、その火がゆらりゆらりと盆灯籠ぼんどうろうの秋風に揺られる具合に動いた。——瓦斯灯ではない。何だろうと見ていると今度はその火が雨と闇の中を波のように縫つて上から下へ動いて来る。——これは提灯ちようちんの火に相違ないとうまく判断した時それが不意と消えてしまう。

この火を見た時、余ははつと露子つゆこの事を思い出した。露子は余が未来の細君の名である。未来の細君とこの火とどんな関係があるかは心理学者の津田君にも説明は出来んかも知れぬ。しかし心理学者の説明し得るものでなくては思い出してならぬとも限るまい。この赤

い、鮮あざやかな、尾の消える繩に似た火は余をしてたしかに余が未来の細君をとつぎの際に思
い出さしめたのである。——同時に火の消えた瞬間が露子の死を未練もなく拈ねんしゆつ出した。
額ひたいを撫なでると膏あぶら汗あせと雨でずるずるする。余は夢中であるく。

坂を下り切ると細い谷道で、その谷道が尽きたと思うあたりからまた向き直って西へ西
へと爪つまあが上りに新しい谷道がつづく。この辺はいわゆる山の手の赤土で、少しでも雨が降
ると下駄の齒を吸い落すほどに溼ぬかる。暗さは暗し、靴は踵かかとを深く土に据えつけて容易たやすくは
動かぬ。曲りくねってむやみやたらに行くと枸杞垣くこがきとも覚しきものの鋭どく折れ曲る角かどで
ぱたりとまた赤い火に出でくわした。見ると巡査である。巡査はその赤い火を焼くまでに余
の頬に押し当てて「悪るいから御氣を付けなさい」と言い棄すてて擦れ違ちがった。よく注意し
たまえと云った津田君の言葉と、悪いから御氣を付けなさいと教えた巡査の言葉とは似て
いるなと思うとたちまち胸なまりが鉛なまりのように重くなる。あの火だ、あの火だと余は息を切らし
て馳かけ上る。

どこをどう歩行あいたとも知らず流星のごとく吾家わがやへ飛び込んだのは十二時近くであろう。
三分心さんぶんしんの薄暗いランプを片手に奥から駆け出して来た婆さんが頓とんきよう狂きやうな声を張り上げ
て「旦那様！ どうなさいました」と云う。見ると婆さんは蒼あおい顔おほをしている。

「婆さん！　どうかしたか」と余も大きな声を出す。婆さんも余から何か聞くのが怖しく、余は婆さんから何か聞くのが怖しいので御互にどうかしたかと問い掛けながら、その返答は両方とも云わずに双方とも暫時睨み合っている。

「水が——水が垂れます」これは婆さんの注意である。なるほど充分に雨を含んだ外套の裾と、中折帽の底から用捨なく冷たい点滴が畳の上に垂れる。折目をつまんで抛り出すと、婆さんの膝の傍に白繻子の裏を天井に向けて帽が転がる。灰色のチエスターフィールドを脱いで、一振り振って投げた時はいつもよりよほど重く感じた。日本服に着換えて、身顫いをしてようやくわれに帰った頃を見計って婆さんはまた「どうなさいました」と尋ねる。今度は先方も少しは落ついていいる。

「どうするって、別段どうもせんさ。ただ雨に濡れただけの事さ」となるべく弱身を見せまいとする。

「いえあの御顔色はただの御色では御座いません」と伝通院の坊主を信仰するだけあって、うまく人相を見る。

「御前の方がどうかしたんだらう。先ツきは少し歯の根が合わないようだったぜ」

「私は何と旦那様から冷かされても構いません。——しかし旦那様雑談事じゃ御座い

ませんよ」

「え？」と思わず心臓が縮みあがる。「どうした。留守中何かあったのか。四谷から病人の事でも何か云なんつて来たのか」

「それ御覧遊ばせ、そんなに御嬢様の事を心配していらっしやる癖に」

「何と云つて来た。手紙が来たのか、使が来たのか」

「手紙も使も参りは致しません」

「それじゃ電報か」

「電報なんて参りは致しません」

「それじゃ、どうした——早く聞かせろ」

「今夜は鳴き方が違いますよ」

「何が？」

「何がって、あなた、どうも宵よいから心配で堪たまりませんでした。どうしてもただごとじゃ御座まいません」

「何がさ。それだから早く聞かせると云つてるじゃないか」

「せんだつて中じゅうから申し上げた犬で御座います」

「犬？」

「ええ、遠吠とおほえで御座います。私が申し上げた通りに遊ばせば、こんな事にはならないで済んだんで御座いますのに、あなたが婆さんの迷信だなんて、あんまり人を馬鹿に遊ばすものですから……」

「こんな事にもあんな事にも、まだ何にも起らないじゃないか」

「いえ、そうでは御座いません、旦那様も御帰り遊ばす途中御嬢様の御病気の事を考えていらしつたに相違御座いません」と婆さんずばと凶星ずぼしを刺す。寒い刃はが闇ひらに閃ひらめいてひやりと胸むねうち打を喰くわせられたような心持がする。

「それは心配して来たに相違ないさ」

「それ御覧遊ばせ、やつぱり虫が知らせるので御座います」

「婆さん虫が知らせるなんて事が本当にあるものかな、御前そんな経験をした事があるのかい」

「あるだんじや御座いません。昔しから人が鳥鳴からまなきが悪いとか何とか善よく申すじや御座いませんか」

「なるほど鳥鳴きは聞いたようだが、犬の遠吠は御前一人のようだが——」

「いいえ、あなた」と婆さんは大輕蔑だいけいべつの口調くちようで余の疑うたがひを否定する。「同じ事で御座いますよ。婆ばあやなどは犬の遠吠えんびでよく分ります。論より証拠しやうここれは何かあるなと思うとはずれた事が御座いませんもの」

「そうかい」

「年寄の云う事は馬鹿に出来ません」

「そりや無論馬鹿には出来んさ。馬鹿に出来んのは僕もよく知っているさ。だから何も御前を——しかし遠吠えんびがそんなに、よく当るものかな」

「まだ婆やの申す事を疑うたぐっていらつしやる。何でもよろしゆう御座いますから 明み朝ようあさ四谷へ行つて御覽遊ごらんばせ、きつと何か御座いますよ、婆やが受合ういますから」

「きつと何かあつちや厭いやだな。どうか工夫はあるまいか」

「それだから早く御越し遊あそばせと申し上げるのに、あなたが余り剛情を御張ごり遊あそばすものだから——」

「これから剛情はやめるよ。——ともかくあした早く四谷へ行つて見る事にしよう。今夜これから行つても好よいが……」

「今夜いらしつちや、婆ばあやは御留守居ごは出来ません」

「なぜ？」

「なぜって、きび気味が悪くついても起たつてもいられませんか」

「それでも御前が四谷の事を心配しているんじゃないか」

「心配は致しておりますが、私だつて怖しゆう御座いますから」

折から軒を繞めぐる雨の響に和して、いづくよりもなく何物か地を這はうて唸うなり廻るような声が聞える。

「ああ、あれで御座います」と婆さんが瞳ひとみを据すえて小声で云う。なるほど陰気な声である。今夜はここへ寝る事にきめる。

余は例のごとく蒲団ふとんの中へもぐり込んだがこの唸り声が気になって瞼まぶたさえ合わせる事が出来ない。

普通犬の鳴き声というものは、後も先も鉈なた刀で打ち切った薪まきぎ雑木を長く継ついだ直線の声である。今聞く唸り声はそんなに簡単な無造作むぞうさの者ではない。声の幅に絶えざる変化があつて、曲りが見えて、丸みを帯びている。蠟燭ろうそくの灯ひの細きより始まつて次第に福やかに広がつてまた油の尽きた灯とうしん心の花と漸次ぜんじに消えて行く。どこで吠えるか分らぬ。百里の遠きほかから、吹く風に乗せられて微かすかに響くと思ふ間に、近づけば軒端のきばを洩もれて、

枕に塞ぐ耳にも薄る。ウウウウと云う音が丸い段落をいくつも連ねて家の周囲を二三度繞ると、いつしかその音がワワワワに変化する拍子、疾き風に吹き除けられて遙か向うに尻尾はンンンと化して闇の世界に入る。陽気な声を無理に圧迫して陰鬱にしたのがこの遠吠である。躁狂な響を権柄、ずくで沈痛ならしめているのがこの遠吠である。自由でない。压制されてやむをえずに出す声であるところが本来の陰鬱、天然の沈痛よりも一層厭である、聞き苦しい。余は夜着の中に耳の根まで隠した。夜着の中でも聞える。しかも耳を出しているより一層聞き苦しい。また顔を出す。

しばらくすると遠吠がはたとやむ。この夜半の世界から犬の遠吠を引き去ると動いていゝるものは一つもない。吾家が海の底へ沈んだと思うくらい静かになる。静まらぬは吾心のみである。吾心のみはこの静かな中から何事かを予期しつつある。されどもその何事なるかは寸分の観念だにない。性の知れぬ者がこの闇の世からちよつと顔を出しはせまいかという掛念が猛烈に神経を鼓舞するのみである。今出るか、今出るかと考えている。髪の毛の間へ五本の指を差し込んでむちやくちやに搔いて見る。一週間ほど湯に入つて頭を洗わんで指の股が油でニチャニチャする。この静かな世界が変化したら——どうも変化しそうだ。今夜のうち、夜の明けぬうち何かあるに相違ない。この一秒を待つて過ぐす。こ

の一秒もまた待ちつつ暮らす。何を待っているかと云われては困る。何を待っているか自分に分らんから一層の苦痛である。頭から抜き取った手を顔の前に出して無意味に眺める。爪の裏が垢で薄黒く三日月形に見える。同時に胃囊が運動を停止して、雨に逢った鹿皮を天日で乾し堅めたように腹の中が窮窟になる。犬が吠えれば善いと思う。吠えているうちは厭でも、厭な度合が分る。こう静かになつては、どんな厭な事が背後に起りつつあるのか、知らぬ間に醸されつつあるか見当がつかぬ。遠吠なら我慢する。どうか吠えてくれればいと寝返りを打って仰向けになる。天井に丸くランプの影が幽かに写る。見るとその丸い影が動いているようだ。いよいよ不思議になつて来たと思うと、蒲団の上で脊髄が急にぐにやりとする。ただ眼だけを見張つて、たしかに動いておるか、おらぬかを確める。——確かに動いている。平常から動いているのだが気がつかずに今日まで過したのか、または今夜に限つて動くのかしらん。——もし今夜だけ動くのなら、ただごとではない。しかしあるいは腹工合のせいかも知れない。今日会社の帰りに池の端の西洋料理屋で海老のフライを食つたが、ことによるとあれが祟つているかもしれない。詰らん物を食つて、銭をとられて馬鹿馬鹿しい廃せばよかつた。何しろこんな時は気を落ちつけて寝るのが肝心だと堅く眼を閉じて見る。すると虹霓を粉にして振り蒔くように、眼の前が

五色の斑点でちらちらする。これは駄目だと眼を開くとまたランプの影が気になる。仕方がないからまた横向になつて大病人のごとく、じつとして夜の明けるのを待とうと決心した。

横を向いてふと目に入ったのは、襖の陰に婆さんが叮嚀に畳んで置いた秩父銘仙の不断着である。この前四谷に行つて露子の枕元で例の通り他愛もない話をしておつた時、病人が袖口の綻びから綿が出懸つているのを気にして、よせと云うのを無理に蒲団の上へ起き直つて縫つてくれた事をすぐ聯想する。あの時は顔色が少し悪いばかりで笑い声さえ常とは変らなかつたのに——当人ももうだいぶ好くなつたから明日あたりから床を上げましようと言つたのに——今、眼の前に露子の姿を浮べて見ると——浮べて見るのではない、自然に浮んで来るのだが——頭へ氷嚢を載せて、長い髪を半分濡らして、うんうん呻きながら、枕の上へのり出して来る。——いよいよ肺炎かしらと思う。しかし肺炎にでもなつたら何とか知らせが来るはずだ。使も手紙も来ない所をもつて見るとやつぱり病氣は全快したに相違ない、大丈夫だ、と断定して眠ろうとする。合わす瞳の底に露子の青白い肉の落ちた頬と、窪んで硝子張のように凄惨な眼がありありと写る。どうも病氣は癒つておらぬらしい。しらせはまだ来ぬが、来ぬと云う事が安心にはならぬ。今に来る

かも知れん、どうせ来るなら早く来れば好い、来ないか知らんと寝返りを打つ。寒いとは云え四月と云う時節に、厚夜着あつよぎを二枚も重ねて掛けているから、ただでさえ寝苦しいほど暑い訳であるが、手足と胸の中うちは全く血の通わぬように重く冷たい。手で身のうちを撫なでて見ると膏あぶらと汗あせで湿しめっている。皮膚の上に冷たい指が触さわるのが、青大将にでも這はわれるように厭な気持である。ことによると今夜のうちに使でも来るかも知れん。

突然何者か表の雨戸を破われるほど叩たたく。そら来たど心臓が飛び上あばらつて肋あばらの四枚目を蹴ける。何か云うようだが叩く音と共に耳を襲うので、よく聞き取れぬ。「婆さん、何か来たぜ」と云う声の下から「旦那様、何か参りました」と答える。余と婆さんは同時に表口へ出て雨戸を開ける。—— 巡査が赤い火を持って立っている。

「今しがた何かありはしませんか」と巡査は不審な顔をして、挨拶もせぬ先から突然尋ねる。余と婆さんは云い合したように顔を見合せる。両方共何とも答をしない。

「実は今ここを巡行するとね、何だか黒い影が御門から出て行きましたから……」

婆さんの顔は土のようである。何か云おうとするが息がはずんで云えない。巡査は余の方を見て返答を促うながす。余は化石のごとく茫ぼうぜん然と立っている。

「いやこれは夜やちゆう中はなはだ失礼で……実は近頃この界限かいわいが非常に物騒なので、警察で

も非常に嚴重に警戒をしますので——ちようど御門が開いておつて、何か出て行つたような按排あんぱいでしたから、もしやと思つてちよつと御注意をしたのですが……」

余はようやくほつと息をつく。咽喉のどに痞つかえている鉛たまの丸たまが下りたような気持ちとする。

「これは御親切に、どうも、——いえ別に何も盜難かかに罹かつた覚かはないようです」

「それなら宜よろしゆう御座います。每晚犬が吠えておやかましいでしょう。どう云うものか賊はがこの辺へんばかり徘徊はいかいしますんで」

「どうも御苦勞様」と景氣よく答えたのは遠吠とんが泥棒のためであるとも解釈が出来るからである。巡查は帰る。余は夜が明け次第四谷に行くつもりで、六時が鳴るまでまんじりともせず待ち明した。

雨はようやく上つたが道は非常に悪い。足駄あしだをと云うと齒入屋へ持つて行つたぎり、つい取つてくるのを忘れたと云う。靴は昨夜ゆうべの雨でとうてい穿はけそうにない。構うものかと薩摩下駄さつまげたを引掛けて全速力で四谷坂町まで馳かけつける。門は開あいているが玄関はまだ戸閉りがしてある。書生はまだ起きんのかしらと勝手口へ廻る。清と云う下しも総そう生せいれの頬ほペタの赤い下女まないたが俎なの上で糠味ぬかみ噌そから出し立ての細根ほそね大根だいこんを切っている。「御早よう、何はどうか」と聞くと驚いた顔をして、襷たすきを半分はずしながら「へえ」と云う。へえでは埒うちが

あかん。構わず飛び上つて、茶の間へつかつか這入り込む。見ると御母さんおつかが、今起き立の顔をして叮嚀ていねいに如鱗木じょりんもくの長火鉢ながひばちを拭ふいている。

「あら靖雄さん！」と布巾ふきんを持ったままあつけに取られたと云う風をする。あら靖雄さんでも埒らちがあかん。

「どうです、よほど悪いですか」と口早に聞く。

犬の遠吠とんべいが泥棒のせいときまるくらいなら、ことによると病氣なまも癒なつていいるかも知れない。癒なつていてくれれば宜よいがと御母さんの顔を見て息を呑み込む。

「ええ悪いでしょう、昨日きのうは大変降りましたからね。さぞ御困りでしたらう」これでは少々見けんとう当とうが違ちがう。御母さんのようすを見ると何だか驚おどいているようだが、別に心配そうにも見えない。余は何となく落ちついて来る。

「なかなか悪い道です」とハンケチを出して汗を拭ふいたが、やはり気掛りだから「あの露子さんは——」と聞いて見た。

「今顔を洗っています、昨夕ゆうべ中央会堂の慈善音楽会とかに行つて遅く帰つたものですから、つい寝坊ねぼうをしましてね」

「インフルエンザは？」

「ええありがとう、もうさつぱり……」

「何ともないんですか」

「ええ風邪かぜはとつくに癒なおりました」

寒むすからぬ春風はるかぜに、濛もやもや々たる小雨こさめの吹き払はらわれて蒼空あおぞらの底そこまで見える心地である。日

本一の御機嫌ごきげんにて候そろと云う文句ぶんぐがどこかに書いてあつたようだが、こんな気分を云うのではないかと、昨夕けつせきの気味の悪わるかつたのに引き換かえて今の胸むねの中うちが一層朗らうかになる。なぜあんな事を苦くるにしたろう、自分おれながら愚ぐの至いたりだと悟さとつて見ると、何なにだか馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しいと思うにつけて、たとい親おやしい間柄まがらとは云え、用もないのに早朝はやあさから人ひとの家うちへ飛び込んだのが手持無沙汰てしなに感あぜらるる。

「どうして、こんなに早く、——何か用事ようじでも出来たんですか」と御母おつかさんが真面目まじめに聞く。どう答こたえて宜よろいか分わらん。嘘うそをつくると云つたつて、そう咄とつさ嗟さの際ときに嘘うそがうまく出るものではない。余あまは仕方がないから「ええ」と云つた。

「ええ」と云つた後あとで、廃やせば善よかつた、——一思ひといに正直ちかなところを白状はくじやうしてしまえば善よかつたと、すぐ気がついたが、「ええ」の出たあとあとはもう仕方がない。「ええ」を引き込ひきこめる訳わけに行いかなければ「ええ」を活いかさなければならん。「ええ」とは単簡たんかんな二文字

であるが滅多めったに使うものでない、これを活かすにはよほど骨が折れる。

「何か急な御用なんですか」と御母さんは詰め寄せる。別段の名案も浮ばないからまた「ええ」と答えて置いて、「露子さん露子さん」と風呂場の方を向いて大きな声で怒鳴どなつて見た。

「あら、どなたかと思つたら、御早いのねえ——どうなすつたの、——何か御用なの？」露子は人の気も知らずにまた同じ質問で苦しめる。

「ああ何か急に御用が御出来なすつたんだつて」と御母さんは露子に代理の返事をする。「そう、何の御用なの」と露子は無邪気に聞く。

「ええ、少しその、用があつて近所まで来たのですから」とようやく一方に活路を開く。随分苦しい開き方だと一人で肚はらの中で考える。

「それでは、私わたしに御用じゃないの」と御母さんは少々不審な顔つきである。

「ええ」

「もう用を済すましていらしつたの、随分早いのね」と露子は大おおに感嘆する。

「いえ、まだこれから行くんです」とあまり感嘆されても困るから、ちよつと謙遜けんそんして見たが、どっちにしても別に変わりはないと思うと、自分で自分の言っている事がいかにも

馬鹿らしく聞える。こんな時はなるべく早く帰る方が得策だ、長座ながぎをすればするほど失敗するばかりだと、そろそろ、尻を立てかけると

「あなた、顔の色が大変悪いようですがどうかなさりやしませんか」と御母おつかさんが逆捻さかねじを喰わせる。

「髪を御刈りになると好いのね、あんまり髭ひげが生はえているから病人らしいのよ。あら頭にはねが上つてよ。大変乱暴に御歩おある行きなすつたのね」

「日和下駄ひよりげたですもの、よほど上つたでしょう」と背中せなかを向いて見せる。御母さんと露子は同時に「おやまあ！」と申し合せたような驚き方をする。

羽織を干して貰つて、足駄を借りて奥に寝ている御父おとつさんには挨拶もしないで門を出る。うらかな上天気で、しかも日曜である。少々ばつは悪かったようなものの昨夜ゆうべの心配は紅炉こうろ上の雪と消えて、余が前途には柳、桜の春むらが簇むらがるばかり嬉しい。神楽坂かぐらざかまで来て床屋へ這入る。未来の細君の歡心を得んがためだと云われても構わない。實際余は何事によらず露子の好すくようにしたいと思つている。

「旦那髻ひげは残ひしましょうか」と白服を着た職人が聞く。髻ひげを剃そるといいと露子が云つたのだが全体の髻ひげの事か願あひひげ髻ひげだけかわからない。まあ鼻の下だけは残す事にしようとして一人で

きめる。職人が残しまししょうかと念を押すくらいだから、残したって余り目立つほどのものでもないにはきまっている。

「源さん、世の中にや随分馬鹿な奴がいるもんだねえ」と余の顎をつまんで髪剃を逆に持ちながらちよつと火鉢の方を見る。

源さんは火鉢の傍に陣取つて将碁盤の上で金銀二枚をしきりにパチつかせていたが

「本当にさ、幽霊だの亡者だのつて、そりや御前、昔しの事だあな。電気灯のつく今日そんな篋棒な話がある訳がねえからな」と王様の肩へ飛車を載せて見る。「おい

由公御前こうやって駒を十枚積んで見ねえか、積めたら安宅鮓を十銭奢つてやるぜ」

一本歯の高足駄を穿いた下剃の小僧が「鮓じやいやだ、幽霊を見せてくれたら、積んで見せらあ」と洗濯したてのタウエルを畳みながら笑っている。

「幽霊も由公にまで馬鹿にされるくらいだから幅は利かない訳さね」と余の揉み上げを米噛みのあたりからぞきりと切り落す。

「あんまり短かかあないか」

「近頃はみんなこのくらいです。揉み上げの長いのはにやけてておかしいもんです。——
なあに、みんな神経さ。自分の心に恐いと思うから自然幽霊だって増長して出たくならあ

ね」と刃はについた毛を人さし指と拇おやゆび指ゆびで拭ぬぐいながらまた源さんに話しかける。

「全く神経だ」と源さんが山桜の煙を口から吹き出しながら賛成する。

「神経つて者は源さんどこにあるんだろう」と由公はランプのホヤを拭ふきながら真面目に質問する。

「神経か、神経は御めえ方々にあらあな」と源さんの答弁は少々漠ぼくせん然ぜんとしている。

白しろのれん暖かか簾かかの懸かかつた座敷の入口に腰を掛けて、さつきから手垢てあかのついた薄うすつべらな本を見ていた松さんが急に大きな声を出して面白い事がかいてあらあ、よっぽど面白いと一人で笑い出す。

「何だい小説か、食道くいどうらく楽らくじゃねえか」と源さんが聞くと松さんはそうよそうかも知れねえと上表紙うわびょうしを見る。標題には浮世心理講義録うきよしんりこうぎろく有耶無耶道人著うやむやどうじんちよとかいてある。

「何だか長い名だ、とにかく食道楽くいどうらくじゃねえ。鎌かまさん一体これや何の本だい」と余の耳に髪かみそり剃そりを入れてぐるぐる廻まわ転てんさせている職人に聞く。

「何だか、訳の分らないような、とぼけた事が書いてある本だがね」

「一人で笑つていねえで少し読んで聞かせねえ」と源さんは松さんに請求する。松さんは大きな声で一節を読み上げる。

「狸が人を婆化すと云いやすけれど、何で狸が婆化しやしよう。ありやみんな催眠術でげす……」

「なるほど妙な本だね」と源さんは煙に捲かれている。

「拙が一返古榎になつた事がありやす、ところへ源兵衛村の作蔵と云う若い衆が首を縊りに来やした……」

「何だい狸が何か云つてるのか」

「どうもそうらしいね」

「それじゃ狸のこせえた本じゃねえか——人を馬鹿にしやがる——それから？」

「拙が腕をニューと出している所へ古禪を懸けやした——随分臭うげしたよ……」

「狸の癖にいやに贅沢を云うぜ」

「肥桶を台にしてぶらりと下がる途端拙はわざと腕をぐにやりと卸ろしてやりやしたので作蔵君は首を縊り損つてまごまごしておりやす。ここだと思いやしたから急に榎の姿を隠してアハハハハと源兵衛村中へ響くほどな大きな声で笑つたやりやした。すると作蔵君はよほど仰天したと見えやして助けてくれ、助けてくれと禪を置去りにして一生懸命に逃げ出しやした……」

「こいつあ旨え、しかし狸が作蔵の禪をとって何にするだろう」

「大方寧丸きんたまでもつつむ気だろう」

アハハハハと皆みんな一度に笑う。余も吹き出しそうになつたので職人はちよつと髮剃を顔からはずす。

「面白え、あとを読みねえ」と源さん大おおに乘気になる。

「俗人は拙が作蔵を婆化したように云う奴ですが、そりやちと無理でげしよう。作蔵君は婆化されよう、婆化されようとして源兵衛村をのそのそしているのです。その婆化されようと云う作蔵君の御注文に应じて拙せつがちよつと婆化ばかして上げたまでの事でげす。すべて狸一派のやり口は今日開業医の用いておりやす催眠術でげして、昔からこの手でだいてたいほう大方の諸君子をごまかしたものでげす。西洋の狸から直じきでん伝に輸入致した術を催眠法とか唱え、これを応用する連中を先生などと崇あがめるのは全く西洋心酔の結果で拙などはひそかに慨嘆がいたんの至に堪たえんくらいのものでげす。何も日本固有の奇術が現に伝つたわっているのに、一も西洋二も西洋と騒がんでもの事でげしよう。今の日本人はちと狸を軽蔑けいべつし過ぎるよ

うに思われやすからちよつと全国の狸共に代つて拙から諸君に反省を希望して置きやしよ

う」

「いやに理窟りくつを云う狸だぜ」と源さんが云うと、松さんは本を伏せて「全く狸の言う通とおりだよ、昔だつて今だつて、こつちがしつかりしていりや婆化されるなんて事はねえんだからな」としきりに狸の議論を弁護している。して見ると昨夜ゆうべは全く狸に致された訳わけかなど、一人で愛想あいそをつかしながら床屋を出る。

台町の吾家わがやに着いたのは十時頃であつたらう。門前に黒塗の車が待つていて、狭い格子こうしの際すきから女の笑い声が洩もれる。ベルを鳴らして沓脱くつぬぎに這入る途端「きつと帰つていらつしやつたんだよ」と云う声がして障子がすうと明くと、露子が温かい春のような顔をして余を迎える。

「あなた来ていたのですか」

「ええ、お帰りになつてから、考えたら何だか様子が変だつたから、すぐ車で来て見たの、そうして昨夕の事を、みんな婆やから聞いてよ」と婆さんを見て笑い崩れる。婆さんも嬉しそうに笑う。露子の銀のような笑い声と、婆さんの真鍮しんちゆうのような笑い声と、余の銅のような笑い声が調和して天下の春を七円五十銭の借家しゃくやに集めたほど陽気である。いかに源兵衛村の狸でもこのくらい大きな声は出せまいと思うくらいである。

気のせいかなその後露子は以前よりも一層余を愛するような素振そぶりに見えた。津田君に逢つ

た時、当夜の景況を残りなく話したらそれはいい材料だ僕の著書中に入れさせてくれると云った。文学士津田真方まかた著幽霊論の七二頁にK君の例として載のっているのは余の事である。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：LUNACAT

2000年8月31日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

琴のそら音

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>